九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

西村遠里『居行子』 : 解題と翻刻（一）

吉田, 宰
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1909555

出版情報：文獻探究. 55, pp.21-37, 2017-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

西村遠里『居行子』―解題と翻刻―（一）

吉田　宰

解　題

西村遠里（享保三年〈一七一八〉～天明七年〈一七八七〉）は、市井の天文暦学者として活動した、京都の人である（注1）。天文暦学書の執筆はもちろんのこと、後半生においては、『居行子』（安永四年〈一七七五〉刊）や『雨中問答』（安永七年〈一七七八〉刊）など、多くの随筆を著した（注2）。

ここに翻刻する『居行子』は、『雨中問答』と並んで、彼の随筆の中でも初期に刊行された著作であり、のちに『同後編』（安永八年〈一七七九〉刊）、『同新話』（天明五年〈一七八五〉刊）、『同外編』（天明八年〈一七八八〉刊）と、シリーズ化されるものでもある。

またその中身は、当世の弁惑・俗説批判を述べた章段、人生訓を説いた教訓的章段、自然現象について解説した啓蒙的章段など、まさに雑多な内容からなる随筆と言える。

『居行子』シリーズについては、例えば中野三敏（注3）が、「日用の諸事万般にわたる教訓談義」であると評し、これを受けて門脇大（注4）は、本シリーズを扱うことの意義を次のように説いている。

中野氏の述べるように、『居行子』四編には、通俗的な教訓談義が展開されている。しかし、このことは逆にいえば、諸事に関する当時の一般的な理解や教訓観が述べられているともいい得る。つまり、突飛な著述ではなく、平板な思想・教訓が展開される本書を検討することによって、当時のそれらに関する認識の一端をうかがい知ることができるとも考えられるのである。

このように、本書は「諸事に関する当時の一般的な理解や教訓観」を知る上で有用であり、ここに、『居行子』を翻刻する理由の一つが存する。また、このほかにも、当時の諸学界の動向を知る上において、本書の利用価値は同様に認められる。

例えば、巻一「人相の弁」「易学の弁」では、相学・墨色占・天文占と易占の違いを述べ、とくに易占については新井白蛾の易学に触れ、「古易の会」「射覆会」として賑わった往時の模様を振り返る。

また、巻三「儒者の説」では、当世の朱子学・道学・古義学・徂徠学などの諸儒について、それらが互いに他門をそしり合う現状を述べ、これは儒学の本質を見失っているとして批判する。

さらに、巻四「物産の弁」では、本草家のうち、とりわけ珍奇な物を蒐集・所持することに専一となり、「奇物会」と称する集会まで開いて、本草家としてのなすべきことを見誤った当今の人々を非難する。

このように、遠里の随筆を繙くことで、当時の諸学界の状況が少なからず浮かび上がってくるのである。

最後に、一つだけ付言する。遠里の随筆に対して、「特に際立った一家言や主張があるわけではない」（中野）、「ありふれた資料」（門脇）といった両氏の理解には、たしかに首肯すべきところがある。

しかし一方で、そうした把握の仕方のみでは、この随筆の、「遠里の」随筆たるゆえんが希薄化してしまう。すなわち、ここに語られる通俗的な内容のうちにも、遠里という一人の人間を通して形成された、彼なりの人間観や世界観の反映が少なからずあるはずで、そうした点にも留意することが、彼の随筆の理解には求められなければならない。

遠里の随筆から読み取れる、彼の思想的特徴については、儒学者・熊沢蕃山の学問受容が色濃くみられること、また長崎の天文暦学者・西川如見との関連性があることを、拙稿（注5）において詳しく述べたので、併せて参照されたい。

それでは、以下に底本の書誌情報を記す。

■底本書誌

所　蔵　国立国会図書館（197-176）。

巻　冊　五巻五冊（合二冊）。

刊　写　刊。

書　型　大本。縦二六・四糎×横一七・七糎。

表　紙　紺色無地。（国立国会図書館の後補表紙あり。薄茶色無地。原装の巻一～三、巻四～五、をそれぞれ合綴）

題　簽　「居行子　一（～五）」。刷題簽、子持ち枠、左肩貼付。（国立国会図書館の後補題簽あり）

見返し　「遠里先生著／居行子／平安書肆　大塚酉山房」。

序　文　「居行子序」。序末に「明和九壬辰歳仲呂／岡本隠龍川」。

目録題　「居行子巻之一（～五）／目録」。

内　題　「居行子巻之一（～五）」。巻一内題の次の行下に「西村遠里述」。

尾　題　「居行子巻之一（～四）終」、「居行子巻之五大尾」。

柱　記　「居行子一（～五）」。

跋　文　なし。

刊　記　「安永四年未正月／平安書林／堀川四条上ル町　万屋重兵衛／同町　銭屋善兵衛」。

構　成　巻一：見返し（半丁）、序文（三丁）、目録（半丁）、空白（半丁）、本文（二十二丁半）。
巻二：目録（半丁）、空白（半丁）、本文（二十一丁）。
巻三：目録（半丁）、空白（半丁）、本文（二十三丁）。
巻四：目録（半丁）、空白（半丁）、本文（十八丁）。
巻五：目録（半丁）、空白（半丁）、本文（二十二丁）、刊記（半丁）。

匡　郭　四周単辺。縦二〇・四糎×横一四・〇糎（内矩）。

行　数　序文：毎半葉八行。
本文：毎半葉十行。

蔵書印　「榊原家蔵」「故榊原芳埜納本」「中川氏蔵書」「福」「高安」「本亀」「東京図書館蔵」。

注

（1）　遠里の伝記事項については、渡辺敏夫「西村遠里伝」（『日本天文研究会報文』第四巻第四号、一九七一年六月）、同「西村遠里伝補遺」（同第九巻第一号、一九八〇年六月）、同『近世日本天文学史』上巻（恒星社厚生閣、一九八六年）、浅野三平「西村遠里考」（『国文目白』第二九号、一九八九年一一月）などに詳しい。

（2）　『居行子』の翻刻は、巻五「奢の弁」のみ『日本経済大典』第五二巻（明治文献、一九七一年）に抄録される。また『雨中問答』『同後編』の翻刻は、『京都大学蔵大惣本稀書集成』第一六巻（臨川書店、一九九六年）に備わる。

（3）　「近世中期思想界における諸子百家的現象の流行」（中野三敏・楠元六男編『江戸の漢文脈文化』所収、竹林舎、二〇一二年）。

（4）　「『居行子後篇』巻之四「妖怪之説」―近世怪談の一脈―」（『日本文藝研究』第六七巻第二号、二〇一六年八月）。

（5）　「西村遠里随筆考―蕃山学の受容を中心に―」（『近世文藝』第一〇五号、二〇一七年一月）。

凡例

一、本文には適宜、句読点・濁点・半濁点を付し、段落をもうけた。

一、字体は通行のものに改めた。

一、畳字は「〻」「〽」「々」等で表し、二字以上は「〳〵」「〴〵」で表した。

一、合字はひらいた。

一、不審箇所には右脇に（ママ）を付した。ただし、ルビの不審箇所はルビ中に（ママ）と記した。

一、本文・ルビのうち、版木が欠けたと思われる箇所や墨でつぶれている箇所等は（　）で補った。

一、敬意を表す闕字は反映していない。

一、丁うつりは、　」（丁数オ／ウ）とし、原則、底本の丁付に従った。

翻刻

■見返し

遠里先生著

居行子

平安書肆　大塚酉山房

■序文

居行子序

慈鎮和尚の歌に、人ごとにひとつのくせはあるものをと、きこえ侍るもげにことはりにて、人間常のなすわざ、多くは皆癖ぞかし。人の生るゝや、其気質を天地よりうくる所は同じけれども、父母の清濁により、其性の賢不肖厚薄は出来るなり。其うくる処の性の、賢不肖強弱はさもあれ、生れ出るときは上貴人より下土民に至る」（序1オ）まで、常の仕業を受て生るゝといふ事はなし。生出しときは、草木の実はへ、いづれゆがみたるはなく、風暘雨露霜雪にあふて、生長するにしたがひ、まがれる枝の数そふ事なり。貴人の子を生れ立より田舎へとり、土民の手に養育すれば、田舎者となり、土民の子を藁の上から貴人の家にてそだてあぐれば、貴人の身のならはしに生長す。是皆業になるゝの育癖なり。

世上学文に心をよする」（序1ウ）人、多くは言語までも漢語をつかひ、俗の耳へ遠き事のみよろこび、俗事をいやしめ、今日の事に疎し。渡世第一とする人は、文盲・愚痴を看板とし、道理にうとく、しらしむべからざるの人多し。仏神の利生をせがみ、物いまひする人は、祢宜・山伏に訐かされ、前後のふづまりに心さへつかぬ程の事あり。物を気にかけず、かきやぶりにいふ人は、己が見識を人にたかぶり、王法に背く事をなす。

何事」（序2オ）をなすにも、各此心もちにて、癖なきものはなし。況愚がごとき儕、癖なからんことを欲すとも、およぶべきにあらずとは思へども、伝へ聞、顔回いへることあり。舜何人ぞ、我何人ぞと。故に、およばぬ事にも、よき事を真似せむは、あしきにもあらじ。百里の歩行も一歩よりといへば、せばくかたよらぬしめしもあらばと、居行子に尋ね、世人のまどひやすき事どもを挙て、弁を乞しかば、居行子曰、我等」（序2ウ）ごとき、狂簡にちかき身の、何をか示さんや。只門前の厖のとしよりたるにおなじきのみ。足下の若此おもふもまた癖ならましと。愚曰、老兄のいふ所もまたくせなるべし。門前の老犬は犬中の功を積ものなり。我もまた若犬ならでのみ。何ぞ謙譲のこゝにいたるやと。

強てもとめて是をあつめ、居行子五巻となして、愚が癖のおはりをとげぬ。もしや見る人、愚が」（序3オ）癖を咎て、己をしらずと

するのそしりをなさば、それもまた其人の、癖ならましと爾云。

明和九壬辰歳仲呂

岡本隠龍川」（序3ウ）

■目録

居行子巻之一

目録

人相の弁
天狗の弁
艶こと葉
易学之弁
仙人の弁」（目1オ）（空白）」（目1ウ）

■本文

居行子巻之一　　西村遠里述

人相の弁

人相を見る事、衆人のよろこび信ずるものにて、貴賤雅俗都てたのみよろこんで、近世別而はやり、何某こそ郭西翁の弟子、誰それは何人の門人、某こそたれの弟子など、方々に相学を唱ふる人多く、歴々の儒先生にさへ相人の弟子なる人あり。又自己に神相全篇・柳荘相法等の書によりて、其学を修し、往古・将来の禍福をかたる人あり。甚しく信ずるものは、今日の生産の事、毎日の吉凶にいたるまで、親か主君にものを尋問やうにして、怙恃人あり。これらの人は相家の大事の御客」（1オ）ぞかし。

人相の占、和漢ともに其ためしおほく、其起る事、周服・許負にはじまり、唐挙・天綱なんどいへるものも、皆相者の名あり。尤漢の世に盛にて、呂公が高祖を相し、一老夫呂后・孝恵等を相し、又相者韋賢を相し、我朝にても、高麗の使清友を相せし類を以て、相者の手本とすることなり。

然れども、此やうす、今世人の信じ、相人のもつぱらいふ趣にはあらず。其身一代の貴賤を相するは、相学におゐて尤至極なり。相学をせざる人も、大抵はこれをしる。今の世上に、家事の毎日を相者に憑み、医者に療治をたのむやうにするとは大なる違ひなり。

扨又相学を信ぜざる輩は、人は天地の気をうけ、陰陽の妙合によつて生ずるものなれば、形の」（1ウ）醜猥たる人にも有徳なる人あり。形の美妍なる人にも不徳の人あり。先さしあたりていはゞ、舜も眼に重瞳あり。楚の項羽も又重瞳あり。斉の晏子は其長五尺にみたざれども、斉の賢相たり。其御者は人なみの男なり。此

類、代々の歴史に和漢おほき事なりとて、相者の占不合のことを挙てこれをそしる。徒然草に兼好が書し、秦（ママ）の重躬が下野の入道信願落馬の相ありといひしは、信願好で桃尻の馬に乗しゆへなりといふを、此等こそ実の相者などいひ、または非相篇などを著す。皆これ相者の占（ママ）不合の事をそしるなり。

愚がおもふ所はしからず。相者の占百発百中にして、今日の時務にその益なしとおもふのみ。愚つら〳〵相学の」（2オ）書を見るに、人は小天地なるものゆへにや。天文占に、日月五星の七曜、紫微・天市の三垣、二十八舎、衆星を以て、皇帝・三公・百司・百官・寝宮・朝庭・明堂・倉廩・府庫・苑園・田畠等、其外諸物に配当して、其星の変を以て、各〳〵其吉凶を占するがごとく、人の面部、手裏の文、及び血色等を、それ〳〵に配当し、其変を以て、吉凶禍福を占す。

たとへば両眼を日月とし、左耳を木星とし、右耳を金星、額上を火星、口を水星、鼻を土星とし、又鼻を中岳とし、左右の頬骨を東岳・西岳とし、額と頤を南岳・北岳とし、口を大海とす。掌文も又乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤の八卦の方位を建、父母・妻子・居宅・家産の属を」（2ウ）配当し、眼・鼻・耳・口・眉を五官と建、天中を初年とし、天庭・司空・中正・印堂と段々流年を建、血色も紅色を吉とし、赤はあしく、白を喪、或は憂とし、紫は凶、青・黄・黒、各〳〵右の意味を以て、五行及び吉凶禍福に配し置、其変を以て占したるものなれば、其道執行の功つもりし人ならば、邵子・京房などの易、梓慎・裨竈が天文占のごとく、掌をさすがごとくならんか。道理ぜめにしてこしらへ置たるものゆへ、これを罔するも誤ならん。

然共、これを信じて怙とするもしかるべからず。たとへ名にきこえし相者なりとも、其占を以て今日の産業もつとめられまじ。君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の間がらも、いろ〳〵のさしつかへありて、相者の占の」（3オ）通にもならぬものなり。強て其通にせば、人情そむけて気ちがひのやうにあるべし。たとへ列子にあるほどの上手なる相人ありて、人を相して来年は死すべしといはんに、其人今年いまだ平常のごとく、格別の疾もなく、食事も相応に喰、歩行も不自由なくつとめ居ば、俄に来年の死覚悟なりとて、其身の備を今年切のやうになさば、人々狂気のやうに思ひ、さしつかへさはりがちなるべければ、来年死すべしと聞ても、吾身分のなすべき業の道理のよきことならでは、しられまじきことなり。又相人、来年は立身出世ありて、分限甚富有に成べしといふとても、俄に今年より何角を買立、今の身分より奢がましき事を、見へたあてどもなしに」（3ウ）しもなるまじ。

よしといはれても、あしゝといわれても、今日なすべきわざを大切

に、人事を尽してなすより外はなし。相者のいふところは、たゞ心にこめて、ひとりの覚悟より外、今日の時務にはもちひがたし。心ひとつの覚悟は相人の占をきかずとも、常なきは浮世のならひ。人間万事塞翁が馬。今年の吉事、来年の凶事となるべきや。今日の禍、明日の福となるべきや。はかるべからず。吉凶禍福はさてをきぬ。自己の命さへ今夕の生死知べからず。常々其覚悟して、何時死期にのぞむとも、不覚これなきやうにすべきは、人身の本意なり。

惣じて、天地の道、治きはまれば乱に入、乱きはまれば治に入。月の盈虚の」（4オ）ごとく、盛衰禍福かはる〳〵おこなはれ、将来一寸のさきもしれぬはづと心得、正道をまもり、人事を尽しつとむるうへは、天のなす禍はうくべき事なりとおもはゞ、相者将来の占をきゝても、何の益なき事なりとおもふのみ。相者の合不合を譏は、無理なり。

人相学にかぎらず、将来をしることは、天文占・墨色占・易占等、いづれも道理をせめて、こしらへ置たる物なれば、合もあり不合もあり。十が十ながらあはぬとて叱も、その道理に通ぜぬといふものなり。類は似たれども異同あり。人相と墨色は自己一身の占なれば、事小し。天文は和漢とも其国天下へ対しての事なれば、事大にして、一己の占には」（4ウ）もちひられず。相法は天文を一己へ引をろしつゞめたるやうなものなり。易占は疑ひを決するものなれば、天文・人相・墨色等とは少おなじからざるなり。易学の説の処に委しく弁ず。故に、今こゝにのせず。

惣じて、将来をはかる占法とても、皆人意の作為なれば、万物のなりはじまりしよりの、道理をおもひ合てみれば、拘泥すべき事にあらざるは、弁ずるにおよばざる事なり。

然れども、宇宙に有ほどの物は、皆何をか悪み、何をかすてん。悪人あればこそ善人もあれ。国家昏乱して忠臣あり。そしりにくむも気のせばき事なり。とかく将来を知てもその益なし。相学は理をせめて上手なれば、往古・将来共」（5オ）に合ものとこゝろへてしかるべきのみ。

天狗の弁

世人皆いふ、京師にても、愛宕・鞍馬・比叡、いづれも天狗ありて、山上するに身をきよふせざれば、たゝりをなすと。其外大峰・金比羅・高野・白山・羽黒等、諸国の高山峻嶺、いづれも天狗をいはずといふ事なし。国々の天狗、各〳〵それ〳〵の名あり。或は次郎坊・太郎坊・僧正坊・日輪坊、又はいづなの三郎・霧太郎・白峰太郎なんどいふ。源の義経の兵法は僧正坊に習ひしとて、其形を画工の図するをみれば、頭巾・篠繋をかけ、太刀を佩、小袴を着し、鼻高く、髪なし。今みる山伏のかたちのごとし。皆人おそれこはがる事、

いふ」（5ウ）ばかりなし。

然れども、愚これを思ひみるに、すまぬ事だらけなり。わる口にいふてみれば、愛宕山の太郎坊・鞍馬山の僧正坊なんどは、此方共とおなじく女好と見へたり。女人の山上にかまひなし。又叡山の次郎坊は女好に依怙贔屓ありとみへて、手前の近所の八瀬・小原等の柴苅女は、女人禁制の山界を越て、嶺近く登りても何の咎もなし。外より参れば、鳰照姫のやうな、うつくしいものでも、震動雷電登りがたきよしを勾欄の雑劇にもつくれり。其余の山々の天狗たちは、たしなんで、女人を嫌ひ、治郎にてもすかるゝか。天狗ありといふ山々、多くは仏菩薩の地なるに、甚死者・忌服をいみ、あるひは男女の淫楽を忌。天狗はそも陰陽の外にもるゝ物か。これもふづまりの一つ」（6オ）なり。各その唱ふる所の名は、何国の誰が子孫にて、いつの時代に天狗に成たりといふ実録もなし。

もとより漢土・天竺等には、今いふ天狗といふものはなし。八大龍王なんどのやうに、釈尊七千余巻の中にも聞及ばず。時珍が本草に、天狗と異名するものあれ共、今いふ天狗にはあらず。獾のことなり。韓退之が汴州乱の詩に、天狗堕レ地声如レ雷とあり。其注に、天狗形如レ犬。又山海経に、天門山に赤犬あり。天狗と名付。其光天にとび、流て星と成。長さ数十丈、其声雷のごとしと。これ天官書・天文志・太平御覧・三才図会・管窺揖要等に所謂天狗星の事なり。日本に云、人面鳥獣のことにあらず。

爰に、于宝搜神記に、南方越の地に鳥あり。陰山に棲で、樹を穿て」（6ウ）巣を作る。口の大さ数寸。木を伐もの過ても是を犯ば家を焼。形鳥のごとく、其名を治鳥といふと。是日本の天狗に似たるものなり。其外みる処なし。

世人天狗に付て、いろ〳〵の奇妙をいへども、実事にしかと見たることもなく、多くは聞伝へ・いひつたへなり。天狗のことを書たるも又然り。日本紀・三代実録等のごとき、証拠とすべき書にもあらず。太平記等のおもしろくせんとて、いろ〳〵の作り事をいれし書物、またはなぐさみによむ、よみ本等の物ならではなし。われら自身に見たることなりなど、たしかに相違なき天狗ばなしをすれども、今京師の町小路建つゞきし所の、上の町のことを下の町にて噂するにさへ、実事大に相違する」（7オ）事おほし。

惣て、世上のことは、しつかりと其身にあづかり聞ことならではしれぬものにて、奇妙不思議のはなしは猶更のことぞかし。儒者達の大事にかけらるゝ、太史公の理屈おやぢが書のこした史記でさへ、実事ならぬうそ多し。日本の物語類は、なを多くは筆者の作りものにして、荘子の寓言同前のことなり。赤染衛門が栄花ものがたり、或は東鑑・甲陽軍鑑等のやうな嘘のなきものは、おもしろき奇妙なことすくなし。

今世俗に、浄瑠理本の作者の趣向にこしらへしことを、いにしへ其通ありしことかとおもふ人多ければ、奇妙ばなしにたぶらかさるゝも尤なれども、天狗の正体はあがめ尊敬すべきものにはあらじ。畢竟、海中に海小僧・人魚等のあるごとく、深山の魑魅の、人に似」（7ウ）たる獣成べし。状さだまるべからず。陰気の凝聚るところより生じたる物なるゆへに、陽気盛の所に天狗住といふことなし。

今其形を図するに、山伏の姿に画は、その住といふ山々、多くは修験僧の住処なれば、それよりおもひよりて図したる物と見へたり。雷を画に其声と光りとによりて、思ひつき、連鼓を背負たる鬼のごときもの、鞭を持居る処を図するがごとし。

名をよぶも同じ、山伏の縁によりて、太郎坊・次郎坊なんどゝ、山伏らしき名を付たりと見へたり。鞍馬山の僧正坊はかの山に、僧正が谷といふ所あるを以ておもひつきたるなるべし。こゝを僧正が谷といふは、いにしへ壱演僧正慈済の、法を行ひたまひしところなる」（8オ）ゆへ、僧正が谷といふなり。さもなくして、大切なる僧正官をいつの御代にか天狗に御許されけん。こゝろもとなし。

義経の兵法をならひしといふことは、張良が圯（マヽ）上の老人に、一巻の書を得て、軍法の奥義を極しといひ、又は楠正成が天王寺にて、太子の未来記を見るの類にて、是皆衆人の帰伏する所をとるの計策にて、軍家により〳〵有事なり。義経いまだ牛若丸たりしとき、鞍馬山にて喜三太といへる兵術者にならひ得られし事なり。

又讃州の金比羅山は、崇徳院御憤の余りに天狗にならせられしといふは、延喜の帝は菅丞相を流罪させられし咎により、地獄に堕たまひしとて、日蔵上人地獄にて、帝に御対面」（8ウ）の所を図せるものあるの類にて、勿体なき事なり。此国に住ながら、日本のあるじを天狗にしたて、或は地獄へおとして外の奇妙をいふは、愚痴朦昧のものゝいふ所なれば、いふにたらず。天子たりといへども、黄泉の道は衆人にかはらず、もとより肉身の事なれば、憤もおなじきはいふもさらなれども、日蔵の徳をいはんとて地獄へおとし、金比羅山を尊くせんとて天狗になしたるものなり。

惣じて、高山俊嶺は大海の沖とをなじこゝろにて、平地より甚高ければ、風雨・寒暑・燥湿の天地の気も平地とはいかふかはり有て、たとへば箱根の宿・愛宕の坊になど泊れば、六月大暑の節にても、夜陰には火鉢よ綿入のきる物よと、平地」（9オ）の冬のごときやうす、諸人のしる所なり。万事もこれに応じて、平地人居の格になきこと多しとしるべし。故に、何となく平地にかわりて物すごき事おほければ、天狗どのゝ所為とおもふ事、有べきはづと察すべし。大峰山上、新客の有時、坊へ礫うつのるいも、其下行米ありてうつ人あること、其すじよりたしかにきけり。人力にてする事をのけても、

高山ゆへ色々の変あり。深山なればかはりし獣あることは、いふにおよばず。海中に諸魚のあるごとく、造化の鑪鞴にて出来る事なれば、いかやうのもの、あるまじきともいはれず。されば、天狗といふ獣ありて、人に害をなす事は、はかるべからず。

さりながら、世人の」（9ウ）おもふやうに、仏神にならべてこはがるべきものにはあらず。只鳥獣と同じければ、鷲・熊・鷹・野猪・狼等のこわさと同じ事と思ふべし。山伏のやうな姿をして、穢不浄や或は罪の軽重の吟味役をして刑罰を行ひ、裂たり殺たりするにはあらず。もし又さやうの事なれば、御公儀の御手伝にもなるべけれども、人の罪の有なし又は善悪のたゞしは外の所ではできぬ事にて、天狗どのゝ細工にはゆかぬことぞかし。

天狗が女を嫌ひが実ならば、自身やつけのない姿ゆへ、女の惚ぬが腹が立て、つかみさくにてこそあるらめ。鼻の高いを見込にうつくしひ女中が股でもあけかけてみせたらば、久米の仙人同前に通力をうしなひ、つかみ」（10オ）さく段ではなふて、して〳〵どふじやと、さぞ御きげんであらふとおもふのみ。

正法にきどくなし。よく〳〵おもひみて、天狗の常の業は何をしてゐて人間のけがれ不浄や、女の罪のぎんみやくするのぞ。味ひこゝろみて黙識してしるべし。

やさこと葉

道おしへ鳥にならひ給ひて、神代のむかし、女神・男神の、みとのまくばいし給ひし夫婦の道は、もろこしにても冠昏喪祭の大礼にして、五輪の一つ。天を陽とし、地を陰とし、あめつちの夫婦の中に万物の子をもふけ、生々するは無尽蔵にしてかぎりなし。その徳をうけて男となり女となり、夫婦中よくやはらぎ」（10ウ）あふて、かはるまじのむつごとのかたまり、一滴のほどこしをうけとめやすふ、めでたふややをもふけ、子孫の種をうゆるより、とゝさまよかゝさまよ、兄よ弟よ、伯父よ叔母よの名も有なれば、人倫の大事にして、われらごときのなぐさみの筆のさきにかくるは、およばぬ事ぞかし。

其大事の道を、かしこき人のさだめおき給へるやうに、三十に成てかはゆひものをこしらへ、二十に成て大事のをつとを持までをまたず、とゝさまやかゝさまの目をぬすみ、をのれがさま〴〵心をかけ、或はくどき、あるひは忍び逢も、夫婦のみちをのけしあとは、皆これいづれも恋ぞかし。

むかし一休和尚の、恋といふその水上を尋ればと、狂歌をよみたまひしごとく、」（11オ）いとしかはひのつゞまるところは、あまのさかほこをもつて、あをうなばらをさぐるより外の事はなし。衣裳の花に魂をとられ、かたちの色に心そら成は恋路のならひ。高きもひきゝもそれ〳〵の恋有て、艶にうつくしゐ粧ひに心うつり、目

もとの塩や醯のかはゆらしさ、風俗に見とれ、笑がほにほだされ、惚るほれんは銘々の物好。蓼喰ふむしもすき〳〵にて、何がかはゆらしひ種にならふやら、それが縁のあじな所ぞかし。あるひは文を取かはし、あひたい見たいわかれのつらさ、鳥は物かはなど、いろ〳〵に恋こがるゝも、おもひのかなふかんじんの床のうち、いとし可愛かすがひは、上一人より下庶人までもうち所にかはりも」（11ウ）なく、其かはゆひ時のおもひは、たかきもいやしきも老たるも若きもおなじことなれども、夜ごとにかはるうき川竹の枕のみおなじからざるべし。

つらひならひは、たがはじめけん。情をうると外題をいだし、松の位のよねたちより辻ぎみのすへまでも、おもはぬ人に夜ごと〳〵大事の〳〵おもふ人ひとりならでは見せまじと思ふ、もゝやはだをうき世のたからにて自由にかはれ、心にもなきあふせの枕、さぞつらひ夜もありぬべし。

流のうちにも真実の恋は有ものなれば、其枕こそほん〴〵のいとしかはゆひむつごとは、かはらぬ常の恋ならまし。たがひにかわす真実にはいのちもおしまず、地獄の沙汰もときこえ侍る金銀でゆかぬは」（12オ）心の鋸絆。いやなとおもふ人が、何ほどかねをくれたとて、きたなひよふで抱つかれもせぬもの。可愛人のかねにつまりてなんぎするをみれば、いとしやとおもふ心より、我身を売て成ともとおもふは此道のならひ。

今のうき世にぜにかねでゆかぬ事は真実の恋と情、まかせぬ命の長短なるべし。常の女中もながれのきみも、おもふ中でさへあれば、真実の恋にていとしひもの。めい〳〵こゝろにとふて、此あだ言をよみたまへ。嘘か実かなんとあらふぞ。

易学の弁

往昔二むかしばかりにもや成なん。東武の人に何某とかやいふ人、」（12ウ）易学に長ぜるといふを以て、東都・京師に名高くおこなはれ、射覆の占と号し、一家の筮法を立、朱子あるひは梅花易等にならはず、古易一家言などいへる書を著し、筮竹も別製にこしらへ、卦象を作る算木等ありて、好事の者これを翫び、老若となく、古易の会よ、射覆会よと寄合ては、或は古人の名を書、亦は当時名誉ある学者・芸者あるひは戯子等の名を書て、筥におさめ、人物なりとて出せばこれを筮し、某の人とさす。或は煙管・宝墨・筆硯等の小器を筥に蔵め、これをさゝしむ。古易の意趣なりとて、卦面の表倒の卦象をとり、又裏面の卦象をとりて、これを占す。

すこしにても文学にたよる人は、これをしらねば」（13オ）すまぬやうにありしも、星うつり物かはり、徂徠学のめいりしとおなじく、今時はいつとなくすたれて、誰か専ら翫ぶ人もなし。まことに世の中の常なきさまなり。其外易学に心をよする人も、とかく失物・待

人・獄訟、又は其身に望む願事、或は疾病・婚姻等の吉凶を占ひあてんことを専一とし、陰陽の理に通ぜんと学ぶ人もなし。天地の道・日月の運旋・陰陽吉凶の本を弁へ、数を極め、来を知にあらずんば、占法の変に通じて吉凶悔吝の機をしらんや。

蓋易学は多端なり。そも〳〵子夏の伝を初とし、王弼が注・朱仲晦の啓蒙・徐紹錦が断易・京房が易伝・邵子の梅花心易・程氏の伝・焦延寿が易林、或は」（13ウ）左伝の易、其外管輅・郭璞・崔浩・載洋・晁以道・呂東萊が輩、各易に名あるものは、一家の学をとなへて異同あり。古易の一爻変も朱子の六爻変も、邵子の先天の易も、諸家の異説も、吉凶悔吝の理を知、嫌疑を定め、惑を決するより外なし。

史記ニ曰、庖犧氏有二聖徳一。仰則観二象於天一、俯則観二法於地一、旁観二鳥獣之文与二地之宜一、近取二諸身一、遠取二諸物一、始画二八卦一、以通二神明之徳一、以類二万物之情一。造二書契一、以代二結縄之政一。神農氏遂重二八卦一、為二六十四卦一と。

こゝをもつて、先天の方位已に定る。其時いまだ易に文字なし。文王後天の方位を定め、辞を繋、周公爻を作り、孔子象を製し、繋辞の伝を述。四聖人」（14オ）の手を経てなるものにして、天地の道を彌綸す。

繋辞伝曰、吉凶者失得之象也。悔吝者憂虞之象也。変化者進退之象也。剛柔者昼夜之象也。六爻之動三極之道也。是故君子所二居而安一者易之序也。所二楽而玩一者爻之辞也。是故君子居則観二其象一而玩二其辞一。動則観二其変一而玩二其占一。是以自レ天祐レ之。吉無レ不レ利。象者言二於象一者也。爻者言二乎変一者也。吉凶者言二乎其失得一也。悔吝者言二乎其小疵一也。無レ咎者善補レ過也。是故列二貴賤一者存二乎位一。斉二小大一者存二乎卦一。弁二吉凶一者存二乎辞一。憂二悔吝一者存二乎介一。震無レ咎者存レ悔。是故卦有二大小一。辞有二険易一。辞也」（14ウ）者各指二其所レ之。云云。

これらの意趣を以てみれば、これを学で幽明之故を知、始を原ね終りに反りて、死生の説を知、鬼神の情状を知、事の成敗を占し、惑を定めてこれを行ふときは、悔すくなし。蓋盈満を慎み嫌疑を決す卜筮の書たるべきなり。

然れども、王世貞史記の評に、伏きの八卦を画するは、筮の為に設るにはあらず。後の聖人、理の数と合するを見て、卜筮を借て其理を明す。理を挙て、これを卜筮に帰するにはあらずといひ、又論語述而篇に、夫子の言、易に及び、五十以学レ易可三以無二大過一矣と。

此章何晏・皇侃・刑昞・朱熹・陳氏・仁斎・徂徠・谷子等の諸儒、其説紛々たりといへども妙解なし。いづれも教の書として解を述る」（15オ）趣おほし。仁斎のいへるところ、易は陰陽消長の変をきはめ、進退存亡の理を明にし、其教をするや、貴処を退き損し、盈満に居するを悪む。故に、これを学べば則よく大なる過ちなき事を得るなりといへり。程子・王世貞・仁斎等の儒、其外の諸儒もさきにいふごとく、教の書と見るの趣おほきほどの事なり。

然るに、今時売卜の者、司馬季主のごときにもあらず。宋忠・賈誼が言の如く、多く誇厳を言て以て人情を得、虚く人の録命を高くして以て人の志を説ばしめ、檀に禍災を言て以て人の心を傷り、矯て鬼神を言て以て人の財を尽しめ、厚く拝謝を求て以て己に私するの党のみ。

今世上に易をいふものは、巫祝と趣を同ふし、聖人の」（15ウ）書名を汚す。何某の射覆の会のごときも、卦象を知り、其決断に功を積の、切磋琢磨の為なるべけれども、四聖の手になるものを以て、戯れに玩ぶ。嗚呼、これ愚が悪む処なり。たとひ浮誉の名ある易者たりとも、拝謝を貪る売卜の徒となんぞ殊ならんや。此等の人は巧詐を述て虚名を飾り、空利を導て愚人を誣。権門に媚へつらひ、財ある人には高礼す。何の識あつてか鬼神幽明の理に通ぜんや。

世俗皆、墨色・人相・筮法、いづれも相同じき類なりと思へり。大なる違なり。人相の弁に委しく述たれば、今こゝに弁ぜず。墨色・人相は其身の将来をうらなひしりて、これをしめすなり。易は疑を鬼神にたゞしとふて、」（16オ）其事の吉凶利害を聞て、凶を棄て吉を行ふなり。

惣じて、人事の利害得失、大抵七分三分、或は六分四分にかゝり、七分道理のよきかたありて、三分あしき事なれば、たれかその三分のかたにつく者あらんや。人の思慮工夫にても、よろしきことおほき方につくはなる事なり。十指のゆびざすところ、十目の見るところは勿論の儀なり。尤千人の諾々は一士の諤々にしかずといふ事もあれども、それは常の規矩にはあらず。大抵世上の事、八人よしといひ、弐人あしゝといはゞ、多分につくとて、多き方になるものなり。

今五分五分の理ありて、甲の方も一得一失、乙の方も一得一失成ときは、いづれか将来の吉になるべきや。人の思慮に及がたし。かゝる」（16ウ）ときは鬼神にたゞしとふて、甲乙其占の吉なる方に従て事をなす。これ易の易たるところならんか。

都て将来を占するは、皆此意なり。人事を尽したる上にて鬼神にたゞしとふなり。今世上にするがごとく、おのれが人事を尽すといふこともなく、いさゝかの物の失たるにも易、おのれが勝手づくの私欲にもそれ占ひと、鬼神にたゞすといふわけにてもなく、売卜の者に

あつらへきく。祢宜・山伏・祈祷坊主のたぐひ、前に云ごとく、其礼物を貪り、自身にも易の道理のはしさへわきまへぬものども、占ひをなして、今日を送る。それゆへ、弁をたくましくすれども、言信あらず、行験あらず。故に、卜筮者は世俗の賤み、汚はしき業とするところなり。今の」（17オ）易学を唱ふる衆中、何程高慢せられても、拝謝を求て占をなすときは、五十歩百歩のみ。その人各司馬季主がごときにはあらざるべし。

愚がおもふ所は、其事の可否を鬼神にたゞしとふ時に当て、信心堅固にして、其身斉潔、戒慎恐懼、敬を致して疑ふ事なくば、朱子の筮法にても、古易の趣にても、何某の占法にても、仮如蔡氏の供範九々八十一の占法にても、いづれそれには拘るべからず。俗にいふ、畳算をおくとも、鬼神これを祐んか。いはんや易の占法をや。青銅十二銭の礼を怙み、売卜にあつらへ、卜者も亦礼物を貪るのみにして、主人も筮者も鬼神をなれあなどり、各おのれが利をのみおもはゞ、汚はしきの業にして、鬼神なんぞ」（17ウ）これに告んや。

如此の事なれば、今世上に占ひ〳〵とやかましくいふは、聖人の易の形によつて、巫祝・山伏の渡世をなすわざとおもふべきなり。まことの易学をまなびえば、天を楽み命をしらん。

子曰、夫易開レ物成レ務冒二天下一之道如レ斯而已者也。是故聖人以通二天下之志一以定二天下之業一以断二天下之疑一。

仙人の説

天狗の弁にいふごとく、日本にはむつかしき天狗といふものを色々と大事にかけこはがれども漢土にはなし。漢土には又仙人といふものを尊び大事にかけれども、日本には久米の仙人ならではさたもなく、列仙伝などゝいふ書もなし。我朝の天狗もふづまりな事のみなるが、」（18オ）唐の仙人も不尤なるものなり。

天原発微に、西山の真氏いふ、神仙の説は斉の威王・燕の昭王のころより始り、秦の始皇・漢の武帝に至て熾なり。皆方士のなす所なりと。秦の始皇帝長生のしたさのあまりに、徐福といふ方士にだまされ、大分の財宝をやり、宝来方丈の島へ不老不死の薬を求めにやつて、間もなく其身は崩御。徐福は仕合して日本に渡り、紀州熊野浦に着船し、定而楽で天命を終りつらめ。今に熊野に徐福の宮とてありときく。西漢の武帝、又仙術を好み、夥敷物入をして、承露盤をこしらへたり。さま〴〵の事を信用ありしゆへ、仙術を奉る方士かはる〳〵出て、やかましくいろ〳〵と仙道をせんぎありしかども、いたづらにその身は崩御なりぬ。

此じぶんより」（18ウ）段々神仙の事を奇妙にして、仙家の書といふもの出来たり。劉向・葛洪が輩、抱朴子・神仙伝等の書をこし

らへ、黄帝・老子を祖とし、黄老の術を学ぶなどゝいふ。にくむべき事か。黄老はともに説かた孔門の教へとはちがへど、仙術の祖とするは取ちがへたる事なり。黄帝は上古の事なればさしをきぬ。老子は長命たりといへども、終る所をしらずとこそあれ、仙人の元祖なりといふ事もなし。後にかれは前の老子よ、これがそふよといふ事あれども、言がちにて、何をそれとたしかなる証拠もなし。取にたらず。老子の学は其意を熟得すれば、世上の儒者の思ふてゐるやうなものではなく、甚尊ぶべき道にて、仙道の祖人なりと」（19オ）いふは、あやしむべき事なり。

仙の事、六経にいでず、列仙伝にはじまる。それ〳〵に得ての術を書のせ、或は風に御し、雲を翔り、或は亀に乗り、鶴に賀し、又は鯉に乗、剣に乗など、さま〴〵の事あれども、誰ありて実にみたる物もなし。又は正史実録にものせず。劉向・葛洪が徒、言出したる事とみへたり。霞を喰ひ、気を呑、齢かぎりなしと。然れども、かぎりなき命をたれがつき従ひて見たる証拠もなし。

周の穆王の児童、世にしる通、酈県山に流れ、穆王のさづけられし、釈迦の四句の文のおかげにて、七百歳を経て、三国の末、魏の文帝の時、名を彭祖とかへて出たりといへる類も、何をたしかなる証拠として、児童の長生したるもの」（19ウ）なりとするや。愚は信じがたし。書ごとに信ぜば書なきにしかずとやらんにて、和漢ともに歴〳〵の書籍、嘘だらけなり。

夫人は上寿百歳前後なる事、和漢ともに凡二千有余年、大抵同じ趣なり。漢土にしても上古の人寿一万歳、あるひは幾万歳などいへるは子細こそあるらじ。実事正史に載するところへきたりては、俄にどか落して、百歳前後になる事、様子有そふな事とさつすべし。

惣じて、万物始あれば終あり。生あれば死あり。不可思議の天地にさへ、邵康節其道理を付て、天地の始終十二万九千六百年一元の数と立たり。いはんや人寿をや。仙人に成おほせても、一度は死すべき事なり。

つら〳〵おもひみる」（20オ）に、死でしもふた後にて見れば、彭祖が七百歳も七夜の内に死だ赤子も同じ事なれば、死生は天にまかせて然るべきなり。

扨長命のうれしひといふも何ぞなれば、ながふ浮世の苦がくるしみたひといふて、長生したがる者もなし。古人いへるごとく、人安なれば生を楽む。痛ば死をおもふと。まことに然り。かくまで衆人のおしむ命なれども、あまりに難儀かさなりて心くるしければ、最早死たひといふ。長病の人、色々薬をのみ、さま〴〵養生してみても、病苦やまざれば、凡人ながらも死覚悟よきものなり。貴人はもちろん平人にても、財宝たくさんに持、何事も心のまゝになる人の死覚悟よきはまれなり。貧苦にせまり、種々の難儀するものは、何も

しらぬ人も」（20ウ）覚悟よき人多し。浮図の教に、財宝をいやしめ、色欲等をいかふしからるゝも、此世に念の残らぬやうにさせる教には尤成事なり。

如ㇾ此の世界の有様なれば、長生したひのも、生てゐて面白めに逢たきのと、死しなのづゝなそふながきみのわるきとの一つにての事にあらずや。いかほどいやがつても一度は終にのがれず。たとへ仙人でも終には死ねばこそ、三千歳の又は七百年のと、それ〳〵に長生のねうちがつゐてあり。其上人界のたのしみといふものは、男女の淫楽、仙人さへ通を失ひしあたりを、心のまゝに欲情を動し、酒宴の興を催し、口に魚肉を喰ひ、美味を楽しみ、眼に華美の飾を見、耳に琴・三味線等の色音をきゝ、或は猿楽・白拍子・浄るり・」（21オ）音曲、又は茶・香・諸芸の楽しみ、或は衣服・家宅の結構、またはその身の立身に権威をとるの類、人情大略相同じく、人々の心に覚への有通りなり。

然るに、仙人の長生するやうすをきけば、喜・怒・哀・楽・愛・悪・欲の七情を離れ、穀食を僻、身には木の葉をまとひ、霞を喰ひ、気を呑、深山幽谷に住と。しかれば、右言立たる人情の楽しみ、一つとしてする事ならず。うまくも有そみ（ママ）なき霞を喰、渇のふせぎにも成そむなき気を呑、裸身に鎧きたやうにさむそふな木の葉を着て、風に御し、雲に翔り、何用が有てどこへ行のか。人情を離れた身には、何を楽しみにするやと。たしかな息子持た親父が身上わたし隠居してさへ、生てゐるうちは人情にまじはらねば、枯木」（21ウ）死灰のごとくしてはいられぬものゆへ、年齢相応に寺参り・仏なぶり、或は碁・将棋・茶・香のるい、何なりともせねば一日もおくられず。

仙人は人情をはなれてのたのしみ、何やうの事にや。愚が心にては、老衰して人にあかれてさへおもしろからぬ事とおもふに、人倫をはなれて、深山幽谷・空中を翔りあるき、中を飛だとて、見物のない軽業師のやうにて、さして面白き事も有そむなくおもはるゝに、何が楽みに成やらんとおもふ。さやうに不自由なめして数百歳も生のびなば、せいがつきて仕かた有まじとおもはる。

愚やうやく五十余年の齢なれば、仙人から見ては小児同前の事なれども、次第に何事もめづらしからず、楽みすくなしとおもふに、此うへに酒ものまず、芝居」（22オ）へもゆかず、蕎麦もくはず、女のそばへもよらず、魚鳥野菜の膳にもすはらず、中を飛だり雲に乗たりするばかりをたのしみにして、五百年も生て居よといはゞ、折角の難儀、さら〳〵望なき事ぞかし。

千年生ても迚も終には死ぬる身ならば、命を天にまかせ、人界の苦楽を人なみにして、よいかげんに終をとげ、あとから生るゝ人と入かはりして、あと札を乾坤にわたし、生死の木戸を出て、帰根・復命、

世路を休せば、天地の至楽たらんか。

それともに、仙人の仕かたにてもくるしからず、長生がしたひとおもふ人は、其日から先三度の喰物や、酒魚肉等をそろ〳〵とやめかけて、稽古し給ふべし。此方ごときの」（22ウ）俗情の者は、さやうの事にてはおもしろからず。男のとしの寄たる給仕人より、わかき女の給仕は喰ものもうまし。次酒より諸白はうましといふこゝろなれば、なふいやの仙人にてこそ有なれ。

居行子巻之一終」（23オ）

（次号につづく）

（よしだ　つかさ・本学大学院博士後期課程）